

2022年6月19日 聖餐式説教

教会の暦は、聖霊降臨後の季節に入ってまいりました。本日から11月後半にかけて、本年は主にルカによる福音書の記述をもとに、主イエスの教え、奇跡、たとえ話から学んでいきます。ガリラヤにおける人々を対象とした宣教活動に、私たちも時間と距離を超えて共に連なる季節です。

本日の福音書の冒頭で、主イエスが祈っておられたという記述があります。祈るのは当たり前だと思われるかもしれませんが、ルカによる福音書は、主イエスが祈り続けていたことを特に強調して私たちに伝えていています。弟子たちを選び出す時に徹夜をして祈られましたし、今日のところも弟子たちへ重要な真理を示すために祈っておられたのです。

さて本日の聖書の箇所は、ガリラヤにおける宣教活動の前半と後半を分ける重要な箇所でもあります。前半における宣教活動では、教えを宣べ伝え、奇跡を行って神の国の力を示し、たとえ話で神の国について語り伝えることはあっても、十字架の受難について触れたことはありませんでした。主イエスのご自身が十字架で命をささげることがすでにご存知でおられました。それを弟子たちにいつ示すのかを祈りの中で見出しておられたのです。

弟子達もまた主イエスのことをはっきりキリスト（救い主）だと理解してはいないようです。あるとき、主イエスと弟子達が船に乗って嵐にあったとき、主イエスが波をおしかりになると嵐は止んだということがありましたが、その時弟子達は主イエスを「この方はいったいどなただろう？」と話し合ったようです。主イエスのご自身のことを、弟子たちをはじめ全ての人に理解してもらいたいと願っていたのに違いありませんが、どうしてご自身ではそのようなことはなさらなかったのでしょうか。

それは、救い主というのは教えられるものではない、説得されたり押しつけられたりするものでもない、出会った人自身が自分で受けとめることだということです。主イエスに出会った人自身が主イエスを救い主と受けとめるかどうかが問われているのであって、主イエスの方から私がキリストだ、救い主だということではないのです。主なる神はいつも私達の目の前におられます。しかし主なる神は自分の方に目をむけさせようとか関心をひこうとはなさらないので、それはあくまでもその人自身の問題であって自由に委ねられているので

す。救い主と受けとめようとも拒否しようともそれはその人自身の自由なので
す。私達の信仰生活は、主なる神が自分に何をしてくれる、どんな役得がある
かということではなく、絶えず主なる神から決断を求められ、歩いていく過程
であるのです。そして主は、私達の決断に応じて審きを行われるのです。

『「人々は、人の子のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。弟子
たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言う人も、『エリヤだ』と言う人もいます。
ほかに、『エレミヤだ』とか、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」イエスが
言われた。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」シモン・ペ
トロが、「あなたはメシアです」と答えた。』

こうしてみますと、弟子達はまだ主イエスの存在を十分受けとめてはなかつ
たようです。しかし主イエスとの出会いは確実に心の中に芽を出し、成長させ
られていたのです。ペテロの答えはそのしるしです。そしてこれが私達のも
つべき信仰であり、信仰生活の姿であるのが示されております。

このペテロの答えを聞いた主イエスは喜ばれました。主イエスの存在を正し
く受けとめていたこと、そして弟子達が主なる神によって正しい目を開かれて
いたからです。そして最後の部分に記されていたことは、私達の属する教会に
とって大切な箇所であります。

メシアといえば、人々は政治的な支配者だと考えていました。ユダヤの国は
ローマ帝国によって厳しい属州支配を受けており、メシアはこの苦難から救っ
てくれるのだと思っていたのです。しかし主イエスはそのような存在ではなく、
ご自身の命をささげて神の国への招きを人々に与える、命をささげるメシア
だったのです。永遠の命への導き手であるメシアです。

この後、主イエスは、教え、奇跡、たとえ話を続けながら、十字架の受難に
向かって歩み続けていきます。エルサレムで待つ受難への道のりが大きく膨ら
まされて記されているのがルカによる福音書の特徴です。弟子たちは十字架を
向う主イエスに従いつつ、日々を共にいたしました。私達もまた、十字架へ
向かう主イエスに従いつつ、その宣教活動へ共に参加してまいりたいものです。